

日本百將傳一夕話

九

2332

2

日本百將傳一夕話卷之九

東都

目錄

○ 護良親王

○ 源尊氏

○ 源義貞

○ 楠正成

○ 那和長年

○ 赤松圓心

松亭金水謹撰

○ 宇都宮公綱

○ 源顯家

以上八將目錄終

永田姓



人皇九十四代

後醍醐天皇

御諱尊治

尊良親王

世良親王

護良親王

征夷大將軍

母民部卿三位号

号大塔宮

尊雲法親王還俗

護良親王

人皇九十四代 後醍醐帝建武三年祚終
今安政三迄 五百三十二年 成

護良親王者

後醍醐帝之子也元

弘之騷擾在吉野壘敵急攻逃去匿

山中其際運密策數矣國寧後為征

夷將軍遂被譖殺

佛門不入て敵山の座主より一も積奉武家の藩志を怒り。天皇を勅り奉る。兵を率ひ多く難難を嘗て王室恢復の功を立し。人々ども。婦人の長言且後居の計略に罹る。功ありても社せらる。及終小陰謀の爲に殺せらる。天命を不承る。

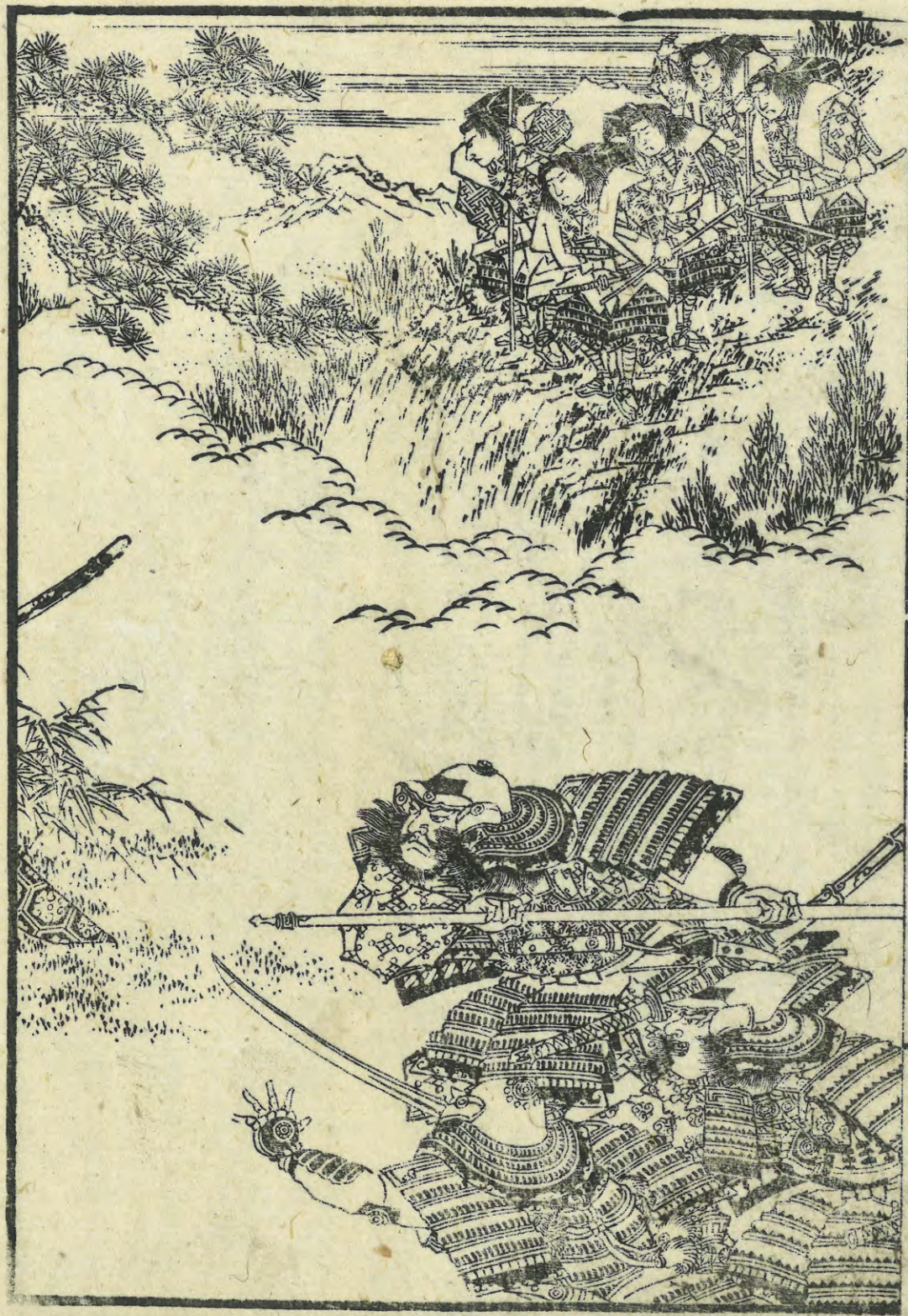
護良親王の跡

本朝通記の如く、後醍醐帝の第六子なり。と河系統記を案ずるに上件小若公が
て、第に子にまゐるのいふに、就きしをききて、かくて佛門に入る。比叡の府主として
尊皇法親王と號し、ひがま下深金の執権北條相模守平高時嫡孫にて、皇統
で茂如人、我名を養ひて天下の政事大小悉くこれにあらば、性年承久の礼より、
皇室衰へて、武家の権威熾なり。この親王、且圓頂深衣の夢となり、せのひーと、世志
極くまじくけしき、これを餘所にし、ふと思ひて、時々天皇に勸め、事々深金を整減し、
王道に復し、之と再々密にけしき、天皇既に世心を決し、便置の者を遣り、ひ
のふに土岐頼遠が、意心不固で、密謀忽ち殺せり。日野資朝、後基等、深金に與て、資朝
は依り、左遷せしむる。その年の事、実太平記に委し、けしき、ふと思ひて、
金水按るに、天皇の留深金、更一朝のふと思ひて、をぬる、文保元年九月、伏見院

崩御し、ひがま東宮尊位に即り、こと、後醍醐天皇なり。かくて、主太子あり、と、法

親王、後醍醐帝の第六子なり。と河系統記を案ずるに上件小若公が
て、第に子にまゐるのいふに、就きしをききて、かくて佛門に入る。比叡の府主として
尊皇法親王と號し、ひがま下深金の執権北條相模守平高時嫡孫にて、皇統
で茂如人、我名を養ひて天下の政事大小悉くこれにあらば、性年承久の礼より、
皇室衰へて、武家の権威熾なり。この親王、且圓頂深衣の夢となり、せのひーと、世志
極くまじくけしき、これを餘所にし、ふと思ひて、時々天皇に勸め、事々深金を整減し、
王道に復し、之と再々密にけしき、天皇既に世心を決し、便置の者を遣り、ひ
のふに土岐頼遠が、意心不固で、密謀忽ち殺せり。日野資朝、後基等、深金に與て、資朝
は依り、左遷せしむる。その年の事、実太平記に委し、けしき、ふと思ひて、
金水按るに、天皇の留深金、更一朝のふと思ひて、をぬる、文保元年九月、伏見院
崩御し、ひがま東宮尊位に即り、こと、後醍醐天皇なり。かくて、主太子あり、と、法
親王、後醍醐帝の第六子なり。と河系統記を案ずるに上件小若公が
て、第に子にまゐるのいふに、就きしをききて、かくて佛門に入る。比叡の府主として
尊皇法親王と號し、ひがま下深金の執権北條相模守平高時嫡孫にて、皇統
で茂如人、我名を養ひて天下の政事大小悉くこれにあらば、性年承久の礼より、
皇室衰へて、武家の権威熾なり。この親王、且圓頂深衣の夢となり、せのひーと、世志
極くまじくけしき、これを餘所にし、ふと思ひて、時々天皇に勸め、事々深金を整減し、
王道に復し、之と再々密にけしき、天皇既に世心を決し、便置の者を遣り、ひ
のふに土岐頼遠が、意心不固で、密謀忽ち殺せり。日野資朝、後基等、深金に與て、資朝
は依り、左遷せしむる。その年の事、実太平記に委し、けしき、ふと思ひて、
金水按るに、天皇の留深金、更一朝のふと思ひて、をぬる、文保元年九月、伏見院

崩御し、ひがま東宮尊位に即り、こと、後醍醐天皇なり。かくて、主太子あり、と、法
親王、後醍醐帝の第六子なり。と河系統記を案ずるに上件小若公が
て、第に子にまゐるのいふに、就きしをききて、かくて佛門に入る。比叡の府主として
尊皇法親王と號し、ひがま下深金の執権北條相模守平高時嫡孫にて、皇統
で茂如人、我名を養ひて天下の政事大小悉くこれにあらば、性年承久の礼より、
皇室衰へて、武家の権威熾なり。この親王、且圓頂深衣の夢となり、せのひーと、世志
極くまじくけしき、これを餘所にし、ふと思ひて、時々天皇に勸め、事々深金を整減し、
王道に復し、之と再々密にけしき、天皇既に世心を決し、便置の者を遣り、ひ
のふに土岐頼遠が、意心不固で、密謀忽ち殺せり。日野資朝、後基等、深金に與て、資朝
は依り、左遷せしむる。その年の事、実太平記に委し、けしき、ふと思ひて、
金水按るに、天皇の留深金、更一朝のふと思ひて、をぬる、文保元年九月、伏見院



村上天

護良親王

熊野落村上

義光勇

現い

房に告ぐ。宋の大傷朱勝菴の四書集注此より六年前本朝に世傳ひしを知る。あづけ我幸ひ小長を得て深くこそを尊信ま。今君小こそを借さん。ひをこの書に置く。ま。藤原源氏といふもの。その学風傷件を混じて經書小一なる。故小原信と合せと。あ。さ。さ。バ。廣信。今ふ。放。朱。姓。を。漢。の。師。祖。とい。え。む。作。き。慕。ふ。一。同。始。休。願。畢。小。大。塔。宮。の。車。蹟。に。お。ける。太。平。紀。小。載。て。予。遺。方。う。さ。さ。今。懷。仁。を。う。の。も。ん。悉。く。教。養。言。なり。然。る。と。い。ふ。も。の。親。王。小。園。村。上。義。光。父。子。の。忠。義。深。く。其。心。さ。る。と。あり。依。て。ま。さ。こ。の。人。抄。出。し。親。王。の。傳。小。合。せ。て。以。て。后。の。后。子。を。勵。さん。と。し。于。時。正。慶。元。年。坐。置。の。皇。后。教。の。為。小。服。ら。も。天。皇。隱。岐。小。遷。さ。さ。の。ふ。こ。小。放。て。大。塔。宮。の。信。潛。之。藏。さ。の。人。一。宗。院。の。候。人。按。察。院。服。好。專。る。老。皇。子。の。こ。小。隱。岐。を。知。る。五。百。騎。を。平。て。殺。美。さ。て。圍。む。自。身。子。殺。美。終。の。槌。小。か。く。と。さ。き。と。逃。さ。る。紀。及。の。方。へ。落。る。ふ。あ。の。時。左。右。小。從。ふ。者。光。林。房。玄。尊。赤。松。則。祐。木。寺。相。模。村。上。義。光。夫。田。彦。七。に。同。八。郎。平。賀。之。郎。同。本。之。河。房。武。義。房。等。僅。九。人。と。

が。く。ち。の。を。ち。か。ん。そ。か。あ。伏。の。貌。小。打。扮。險。阻。難。難。を。終。て。紀。伊。國。十。津。川。の。邑。小。到。る。嘉。士。戸。野。兵。衛。自。子。に。通。下。墨。を。集。て。防。護。せ。り。戸。野。の。伯。父。あ。る。竹。束。八。郎。も。心。を。合。し。皇。子。と。我。鎧。小。入。る。と。小。坐。ま。と。半。平。可。熊。野。の。別。當。室。編。か。る。者。こ。こ。で。受。て。大。小。旗。き。竹。原。が。子。弟。に。終。び。さ。の。子。弟。お。賄。賞。と。食。ふ。皇。子。と。殊。り。と。さ。さ。と。數。面。自。子。と。さ。さ。と。知。つ。て。悲。び。出。る。野。の。も。小。赴。き。さ。の。こ。の。時。芋。原。莊。同。自。子。を。拒。ま。し。と。新。國。と。居。て。こ。こ。で。俟。つ。國。で。進。退。合。さ。さ。と。如。下。ま。づ。芋。原。で。説。て。密。小。と。通。ら。ん。と。芋。原。が。鎧。小。到。り。利。害。を。説。小。芋。原。つ。や。肯。ん。ぞ。我。武。令。で。守。つ。て。皇。子。と。侍。つ。據。小。せん。と。さ。さ。職。か。り。然。し。ど。も。恐。く。も。憐。れ。と。も。さ。の。窮。鳥。の。懷。に。入。る。と。に。我。擒。し。な。ま。と。悲。び。び。さ。さ。は。從。老。の。中。一。兩。輩。の。首。と。斬。て。其。人。ら。う。さ。さ。は。若。の。盟。軍。と。揚。ぐ。ん。さ。れ。バ。开。て。り。武。家。に。謝。せん。さ。さ。は。主。從。據。と。な。り。て。鎌。倉。へ。送。さ。し。と。侍。者。兄。小。の。ひ。け。さ。赤。松。則。祐。進。と。出。た。さ。さ。を。さ。さ。と。令。と。致。ひ。小。士。丈。の。守。り。所。な。り。願。ふ。我。首。を。刎。て。彼。が。望。み。小。任。し。る。と。言。も。終。る。は。佩。刀。と。接。て。脱。け。自。ら。う。首。刎。ん。と。ま。平。賀。之。郎。遽。て。止。め。想。え。る。

股肱となつて共ふこの艱難と嘗め。龍の如く清濁を辨る者と殺まをりて君快しと思
 さんや。若し君が璽章と喪主に従軍に通らば。錦の旗と芋渚小堀ひたきと脱走程
 と二里と小村と義光のあつて衆に後と。一人地來るに芋渚が郎等親王の旗とて
 在るを怪し。その故と問ふ。此と。小村と大木憤逆し。今皇子賊佐と云ふ。國家を清めんと
 一の道有途と汝等の妨げんや。とのひの件。白旗を奪ひその奴を極とす。さうあけ。
 抱ふことと。可う芋渚忠とて取て逐ひ。村と自らに追著て。白旗と歎くことと。を清る。自ら大
 小威。一の則依。忠の益之。舍が義を守り。平賀が智。陳丞相が謀。海老光が勇。北宮
 殿が勢。ひと。後けり。天との三傑を我。小福の宣。天下と。治めざらんや。と。大木勇と。歎び。ひ玉璽の
 莊司が。彼に。到る。ふ。小の。復讐を。居る。自ら。に。固。八郎と。矢田彦七と。遣。去。玉璽。不利害と。
 解。を。あら。ふ。ふ。通。便。不。肯。な。ぞ。割。へ。の。兩個を。五。所。小。害。さん。と。數人。を。て。逐。逐。る。に。愚。夫
 因。ハ。端。止。ま。う。集。集。と。ま。時。裁。ひ。ける。が。彼。ハ。多。勢。此。ハ。兩。個。に。固。數。多。傷。と。被。う。矢田彦七

小對ひてのやうに我軍を負て居る。足下早く往て若小吉は我のこの所にて死す。と言
 も終らば群がる敵の中へ蒐入て討死し失回へまよう。引か。かくと言ふ宮城のひささる
 各準備をてその敵を防ぐ。然れども衆寡敵せず必我の討るべし。美死さるる面の皮
 を剥て敵人小吉と知りてある。吾らあて死せりとのぞ。天下の官軍望を失ひ我々大
 小池む。と左右小令にて侍のふ玉置が兵卒墓地小池来るを徒捕はせんとし赤松村と
 ちの餘の兵士とて先途と防ぐをう。野長瀬六郎及び七郎。千條誘の兵と卒て自皇
 を援ひふ来るに遭ふ玉置が勢いとはふ恐れ勇気摧けく引退く自ら大小敵びのひ野長
 瀬兄弟が功で勞らひまよう吉野の城に入る。かくて正慶三年春二月東兵大挙をて楠正成が
 守る処の金剛ふへ陸奥右馬頭まて吉野へ二階堂道繼二万餘兵小ねとて急をて攻
 撃けり。然るに城兵固く守りて斬くこととて援て能をむ。こふ協導吉野の執行老忠榮九
 とのふりの。この城後の險阻ゆへ人跡を絶てまふ。とて憑て守りて措く。若くは皆て殺る。

卷之六

群玉堂藏板

侍の事 あつち 一 さう 官と称して自殺の四方の軍勢一所不集り。さうも威を唱へけり。親王のゐるに大河の邊
 へり。 ゆきぎくさるあつち 小まはこふ兄弟九親王の城と通とつて参り。五百餘兵を率て跡を尋ひけり。親王に逃遁を
 せし こころんどうしうけんちやう 光の子義人義隆曲道にこそとて支え教を斬ると數十人賊兵怖まて近づば義隆こそ防ぐ
 と。 やんしんしあつち 良半時餘にこそとて教箇所の傍を駆けまて今こそ是まで参り。宮も遠に落ちん
 せり りんさう ともて林藪の中に入。自殺して失せけり。是より偽義人義隆父と記を俱ふせんと。義光
 と あつち 見て大ふ河と同じ死さば君の為ふがせ。こふ死にて何の益ある。鳥謝の白癡と罵りまはて
 の死て果て親王不従ひける。今果して初め如く父が遺言で果しけり

按るに本朝通記の父子を續くといふ。義光初從皇子。自廼登南紀之間。
 以徃百戰万危不顧其身遂以命代君之大事真千古之英雄可謂猶步
 前後護良先以義光比宮黝宮黝猶有勇無義如義光父子勇也忠也
 萬世漢有紀信我朝有義光孰人謂其忠之雄劣乎と云へ

分

是より後大塔宮の楠正成が計らひて河内國金剛山の奥觀心寺に忍び奉はる。邦徒
 妻もこれを知り甘きとえかくて帝の隠岐に遷させ置て在ける。天運順環の時や来に
 けえ弘治二年後二月下旬依て本富士名判官義總心を願けて先帝を救ひ出さんと
 けるより。出雲を越て塩谷高貞名和長年一本槍等と推らひて先帝を竊に救出し
 入は奉はる。ふたたび四國中國西國の統たりとて多く官軍に率けり。されば東西一
 時に礼は新田小太郎源義貞東に兵を奉て百戦百勝餘にうち入る。北條家系を滅
 せり。因て先帝重祚し。のち徳氏泰年の日小遣と称ふ。然るに護良親王の兵と大和の志
 貴小屯。我衣と解は洛ふ入る。因て坊門清忠と勅使とて今天下ふ版に然るに猶
 兵と備へ我外ふある。何れぞや四海強礼のその際。先雅と救る。為ふ我衣と看る。一と也。
 世流に太平に及びぬ。且つ速に塘後と解て。門跡相承の業と受べ。と詔を告らば。護良親

一時戰勢を漲るゝとの。滅亡せんと欲する。其の意を盡むの。獨一の獲食之如ト
 この紛争は夫より。その臣側部仲安守を。かの敵に到ら。其の驕る。其の意を盡むの。獨一の獲食之如ト
 けり。嗚呼。悲き。其の國家の爲。其の功業を。其の意を盡むの。獨一の獲食之如ト
 史を傳へ。其の意を盡むの。獨一の獲食之如ト
 折衝威何侃々。彼婦古利於。及。請室書有孰信
 按る。其の意を盡むの。獨一の獲食之如ト
 哉。其計輕舉。而傳聞敵家良策。却害其身。護良實欲。戮足利之暴
 潛志不顯。其情審彼反謀之實。奏天皇。而後討之。可也。皇子之計慮不至
 于斯。以如清忠之姦卿。卒爾奏大事。曷直義之邪。佞准后之功言。不
 構護口。拒其奏乎。直義准后之惡。固不足道。護良亦招延其護者。歟
 云々。と云々。後學の人味りべー

八幡太郎義家

源義國 式部大輔 從五位下

上野國新田三住ス

義重 新田大炊

國康 左二門督

義康 足利三郎

貞氏 從四位下

元弘元年九月五日卒

尊氏 治部大輔

推大納言 征夷大

將軍 贈從一位太

政大臣

延文三年四月晦日

薨五十四歳

等持院如義仁天皇

源尊氏

人皇九十八代 崇光帝 延文三年薨
今安政三辰迄 四百九十九年 成

源尊氏者 清和源氏之胃也 元弘之亂奉

後醍醐天皇之詔 攻破六波羅 使翠花

歸洛 其後東畧 平北條餘寇 乘其勢運自

稱征夷大將軍 以入京 既而奉 光明帝 與

義貞正成相戰 有年 遂得成功 其餘軍務

多艱難 備嘗四海 漸平累世 開幕府

...

之路の延るふは

辛う跡迄のあ



べき。是等の小事に猶豫して大なる過を犯さるべし。入道刀祢等の隨ふ。その不審を慮して
 早く上洛あり。と理を盡して言ひければ、氏竟に心を決し、す如くなる。い
 豫念を進發する。こふ於て大なるのち名越尾張守も後下と軍を促して上洛あり。既ち我
 ひの場に候んで東軍大勝利を笑ひ名越も乱軍に討まける。其の氏を擲るに酒宴を催
 し優然と。その軍の果るを待て。徐々官軍に加つる。人自餘の味方大に少なり。既に退散し
 との老あり。その威勢の傑然たるに思はれて、これを避らざ。かくて其の氏に官軍に屬し。兩六
 波羅を滅して大功を立らせけり。天皇大に嘉譽ありて。從二位小叙し。諱の字を賜ふ。
 武亮常陸下總に封じ。その弟連義をて遠江に封ぜ。因て兄弟の威權並ぶりのなり。
 かくて相模次郎時行兵を信州小記し。豫念を責む。連義こゝとき豫念の管領として元
 勢を固て。將軍の官職を保護し。参及矢矯ふ。屯て。系陣へ急を告ぐ。ば尊氏をて討む。
 の。遣討使を令ぜ。ば尊氏領蒙し。願ひの証表將軍を請ふ。帝嘆し。召て。その

功の深淺不_レ揆_二き_一なり。とまづ關東管領と_レなす。其氏歎_レび系師を發_レし。佐夜の中_二に_一歎_レひ。賊軍敗_レまてその方人殺_レ弑_二式部大輔_一。閉_レ死_二に_一。殘兵悉_レく遁_レと奔_レる。其氏北_レるを逐_レて鎌倉に入_レは。時行_二相模_一。登_レ高_二細坊_一。逆_レひ賊_二を_一尊_レ氏_二ま_一て。其を敗_レは。賊_二の勢_一以_レ却_レて自殺_二し_一。餘黨遁_レと亡_レは。其氏東州頼_レに平定_レひ。かくて其氏功_二に_一誇_レる。初_レめ系師を復_レする時。征夷將軍_二の功_一の深淺_二に_一揆_レと_レなり。然_レるを二_一舉_レて賊_二を平_一ぐ。その勲功大_レなり。今_レの勅許_二を得_一るに及_レむ。と自ら征夷將軍_二と稱_一し。賞與_二を_一辭_レふ。新田_二が族_一の領_レする所の地_二を以_一て諸士_二に_一授_レく。新田_二が族_一の怒_レつ。こ_レもまた是_レの族_二の領_一する所の地_二を奪_一ふ。と_レふ。於_レて兩家_二確執_一。其氏使_二て系師_二に_一遣_レり。奏_レ狀_二を_一捧_レげて。我_レ自_レと毀_レる。我_レ自_レもまた奏_レ狀_二を_一捧_レげ。其氏_二の詐偽_一を_レび。續_レて其親王_二を_一弑_レする。と告_レぐ。天皇_二諒_一めて。其を_レ知_レと。大_レに怒_レつ。て我_レ自_レに其氏_二征伐_一の宣_レ命_二を_一賜_レふ。こ_レより再び_レ撥_レ亂_二と_一なり。箱根_二竹の下_一の合戰_二を_一び。新_二に_一於_レて挑_レを_レあ_レふ。每_レ度_二東軍_一戰_レ利_二を_一其_二の氏_一連_レて敗_レる。及_レび脱_レに其氏_二に_一建_レ長_二寺_一に入_レり。利_レ根_二深_一夜_二の姿_一と_レなり。其_二の朝廷_一

とを北朝と稱しけり。然れども二種の神為の南朝の方にある神聖なり。即位ある
と前後にこの時のことありて義貞の北に在るに屢威を展ひけり。是れ九の城と攻
るに及び流矢に中つて死し。義貞の威に滅るに因て二の天子坐す。是れとも天下大半北朝
に帰し。足利氏の武威熾なり。心美の軍の威も備ふ。竟に十三代の基を固く。時
々南朝の諸將義貞正成のふりなり。頭家長年七の餘の若し。その思を以て後と存
し。君の爲に命を懸け。智恵勇略共に備ふ。一も願ふ所あり。然れども皇運の目と小意へ
おき。ひて是より後五十餘年。吉野の身存し。是れとも。終に力竭て。二の歸に足利氏の
るに及び。勅もまた。是れとも。後の人々。既にお軍の勇を承け。武と名に敬なり。南
朝へ降し。是れとも。あり。衆人義に降し。是れとも。幕府を固き。子孫に傳ふ。實に。氏公の
洪福なり。

附ての此事蹟。太平記及び諸書に載て。人備に。是れとも。其。服目を奉は。の

源義貞

人皇九十七代 光明帝 曆應元年卒
今安政三辰迄 五百十九年と成

源義貞者得護良皇子之令旨而舉義

兵攻鎌倉屢戰屢勝不逾月而高時伏誅

後醍醐帝再踐寶位義貞之功不少未

幾足利氏作乱義貞秉勅征之連年百

戰官兵遂挫黑丸城下白矢殞命惜哉

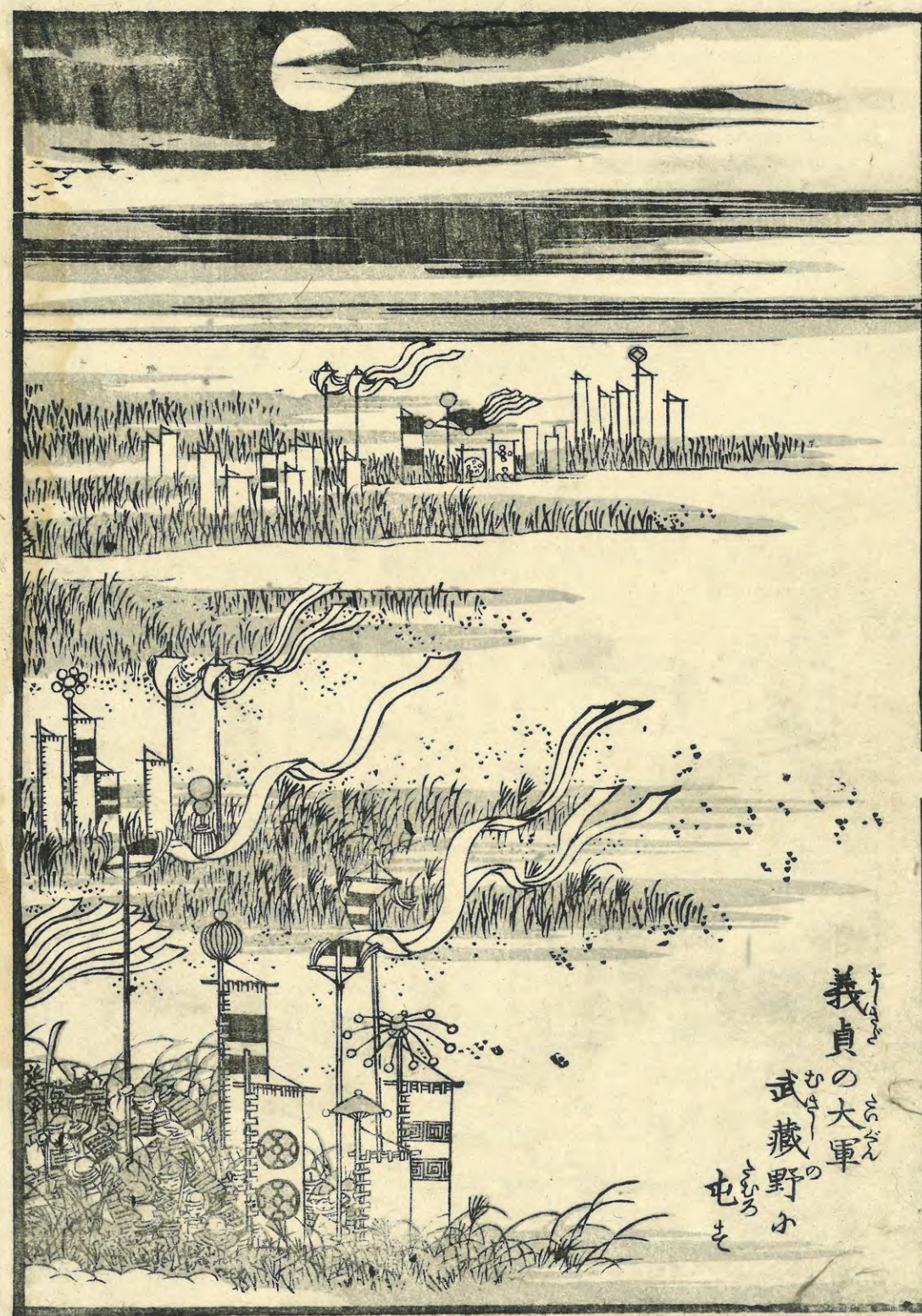
甲斐源氏下。加賀美。義貞。自。立。を。勅。む。義。貞。君。臣。の。後。と。す。ん。だ。敢。て。是。に。從。ひ。南。良。の。國。も。も。勅。む。義。貞。君。臣。の。從。ひ。て。因。て。甲。斐。の。二。子。氏。に。屬。し。義。貞。の。後。心。を。氏。に。信。じ。遠。く。

- 八幡太郎 義家三男
- 義國宗 領
- 源義重 新田大炊
- 義兼 新田藏人
- 右大將 賴朝朝時
- 御門 隨一
- 六代 新田三郎太郎
- 朝氏
- 義貞 左兵衛督
- 左近衛中將 正四位
- 義頭 新田小太郎
- 越後守
- 義興 左兵衛佐
- 正四位下
- 義宗 左少將
- 武藏守

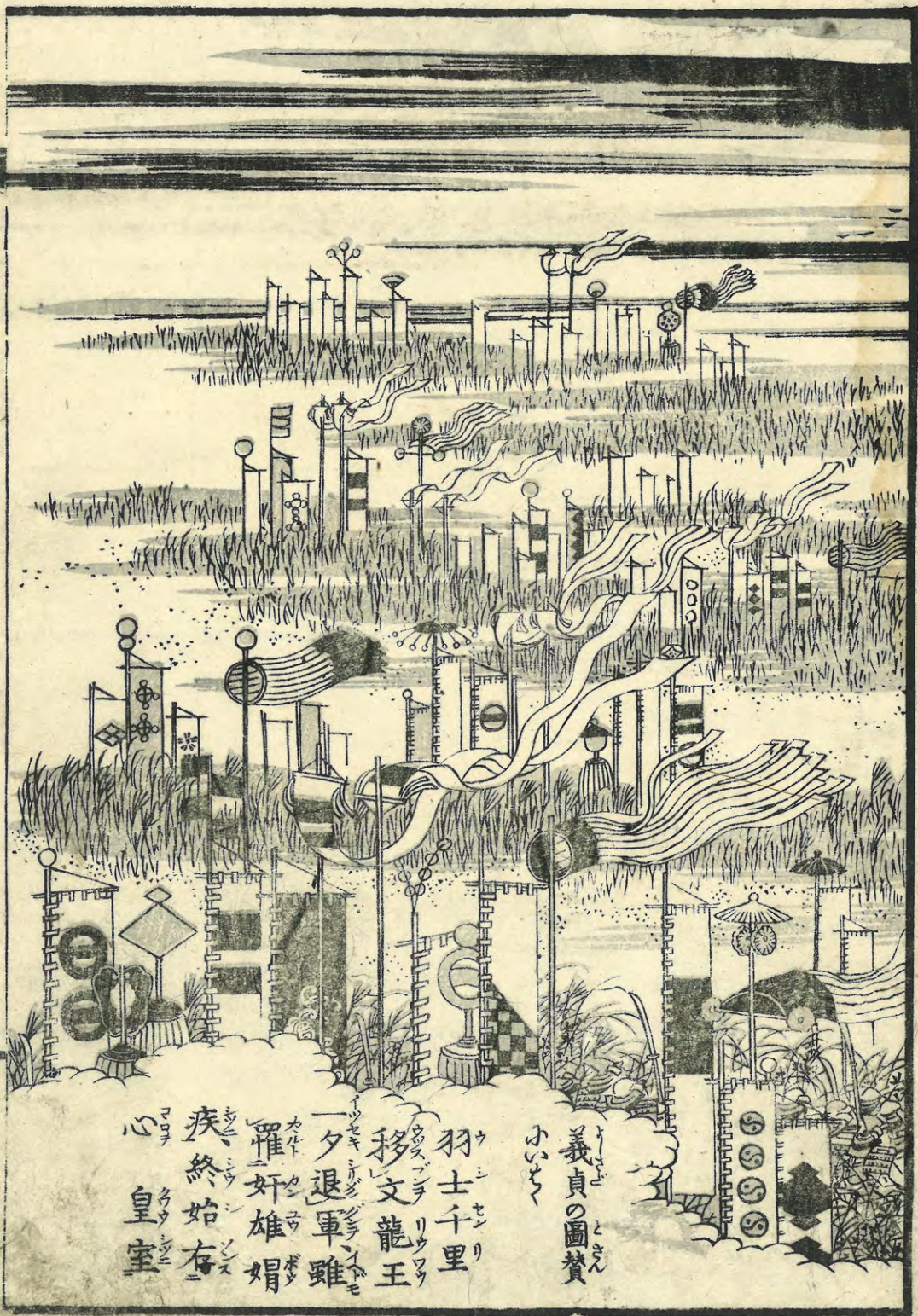
源義貞の治

始め新田小太郎義貞鎌倉の催促ふより一族永従を引俱て千劍波の号にかり
て被坂外に在ける。去ね三月十日、朱希、後醍醐、綸旨で賜ひて、虚病を構へて
小飯王、便置の一族を密かに招き集むるそのわかれ、相模入道の金矛四郎左近大夫
字久、入道二十万勢の選兵を率一と添へ、我内西宮の礼を結めんと鎌倉を進襲ひ、その
兵糧の爲に近所の庄園に條時の課没を撰らば、執中上野ある新田の庄世良田小々
有徳の者の多しと。出雲少親連と、志保、四郎入道、西人使節とて、小栗の大いことと
健責ひ、義貞とて、受て奇怪なり、飯のきと離人們の馬の蹄、さきん、後代までの恥
辱なり。と数支の人数を催へ、先きの西使を引捕へ、割へ、志保を斬て、世良田の甲中に梟
け、相模入道及び悟き新田が所業を捨つる是より、去家て花し、慢る輩、大恥と
思ひ、速に罰にべ。と武義上野の兵に令し、新田の氏族を斃んと、義貞、一族と

集め、如何せん、後せ、ほに、或ひに利根川で前ふあ、防ぐべし、ともあり、ま、去時、勢を
り、敵討及び難かん、ひとまづ、此処を退き、越後の味方と、牒し、合せ、戦ふともあり、評
議紛々として、一決せざ、去下、義貞の弟、服屋長助、進み出て、言ひやう、各の異を全うとて、
我欲する所と異なり、去家、先事より、綸旨で賜ひ、今、義兵を奉は、小栗より、ま、去敵の
旗をもつて、退き、せん、と比喩あり、ま、利根川を前に、まて、防ぎ、うり、とも敵の大軍河を渡
らば、奈何せん、と、ま、宣旨で、預に頂き、只、一決あり、とも、中へ、打出て、義兵を奉へ、小栗著
ば、其まに、鎌倉へ、打入るべし、若勢の著ざらば、鎌倉を、枕として、討死せん、と、後代迄の、誓と
あり、あり、あり、と、ま、その、坐の一族、千餘人、現れ、もの、と、我、と、一決、と、五月八日、卯の刻に
勢を揃へ、生品明神の宝前、ふて、綸旨を、披き、三度拜し、と、小旗を、揚て、笠懸野に、お出ら、
相従ふ人々、大飯二、郎宗氏、子息、孫二、郎幸氏、三男、孫二、郎氏、明、富、美二、郎氏、系、孫、は
二、郎満貞、舍、弟、四、郎行長、兄、松三、郎、終家、里、見、五、郎、義、服、屋、次、郎、長、助、江、田、二、郎



義貞の大軍
武藏野の
屯



義貞の圖贊
羽士千里
移文龍王
一夕退軍雖
羅奸雄媚
疾終始存
心皇室

行長。桃井次郎尚義。と宗統の兵とて。百五十餘騎あり。過さうける。初めて。如何
と。新に利根川の方より。馬煙。天を覆ひ。軍兵三千餘。やど。龍。と。地。来。
騎。被。殺。と。する。所。に。然。い。あ。ず。く。越。後。の。二。族。里。見。鳥。向。中。大。井。田。羽。川。の。人。と。な。る。と。を。
長。兄。弟。大。に。飲。び。つ。に。く。速。る。一。体。と。て。豫。て。より。若。士。飲。一。と。い。ち。り。あ。る。と。箇。
様。と。の。と。に。より。て。律。不。意。不。起。り。と。ま。羽。儀。を。飛。以。暇。も。あ。ら。な。く。て。頼。の。来。著。い。実。
に。佛。神。の。冥。助。と。う。ん。と。勝。つ。と。う。ち。飲。ぶ。彼。人。も。馬。で。控。へ。初。宣。小。園。で。此。の。と。き。大。長。と。思。
ひ。立。り。又。バ。時。月。を。接。さ。び。森。著。あ。ま。と。一。人。の。天。狗。と。依。中。を。觸。は。ふ。り。二。族。元。り。の。も。取。あ。
び。罷。と。向。ひ。て。い。な。り。と。馬。より。下。て。と。代。あ。り。の。他。の。人。殺。途。遠。ま。り。か。あ。ず。明。月。ハ。森。著。い。
べ。他。は。へ。お。出。る。と。う。ん。と。あ。る。と。あ。勢。と。侍。又。と。大。井。田。を。い。お。が。言。ひ。し。う。り。そ。夜。い。す。れ。に。陳。
を。張。て。明。は。を。達。一。と。侍。ける。や。ど。に。甲。斐。信。濃。の。兵。地。加。り。て。五。十。餘。騎。に。あ。り。け。し。と。は。か。て。
ハ。何。の。仔細。と。あ。る。と。同。有。武。藏。野。へ。と。出。る。と。小。呂。利。吉。氏。の。子。息。千。壽。王。紀。五。郎。左。衛。門。

を。徒。へ。密。に。鎌。倉。を。抜。出。り。二。百。餘。騎。に。て。馳。著。の。一。程。も。あ。ら。な。く。上。野。下。野。上。総。下。総。常。
陸。武。藏。の。軍。兵。を。招。う。と。る。小。雲。霞。の。と。く。馳。来。つ。と。そ。暮。方。に。至。り。と。四。万。七。千。餘。騎。と。な。
と。は。さ。う。も。小。度。き。武。藏。野。も。月。ハ。尾。花。の。末。ち。と。そ。列。ね。る。劍。戟。の。同。う。出。て。馬。鞍。の。
と。を。輝。さ。と。風。小。靡。ける。旗。の。彩。に。入。は。さ。を。鎌。倉。い。の。と。う。と。て。畿。内。九。國。の。礼。と。の。と。
藩。籬。の。中。より。起。る。と。実。に。天。下。の。大。事。と。金。澤。武。藏。守。貞。將。以。幸。餘。騎。を。相。副。て。下。河。辺。
の。又。下。さ。と。二。隊。ハ。接。回。治。部。大。卿。貞。國。を。大。ね。に。て。長。次。郎。守。重。と。加。治。二。郎。左。衛。門。入。道。
小。方。幸。餘。騎。で。副。て。入。河。向。ら。ま。ける。か。て。長。貞。ハ。武。藏。金。小。手。差。系。入。る。河。と。う。ち。渡。
接。回。長。次。郎。兵。に。は。た。し。夫。より。及。の。合。戦。小。原。平。五。に。勝。敗。あり。竟。に。鎌。倉。勢。利。あり。と。て。大。
敗。を。に。に。放。て。新。田。貞。貞。鎌。倉。へ。入。り。小。橋。村。に。渡。り。龍。神。を。祈。る。海。面。忽。ち。干。涸。と。あ。
て。軍。兵。勢。で。得。る。と。り。の。相。撲。入。道。力。竭。て。二。門。自。害。ひ。か。ひ。と。載。て。太。平。記。に。詳。あり。か。て。軍。功。
の。賞。三。行。と。新。田。長。貞。左。中。將。小。橋。幸。と。上。野。播。磨。に。封。せ。と。金。矛。義。助。ハ。後。河。を。賜。る。

然るに義経も是利を氏備上りて詔を受け。義貞東國より向ふ脱け。氏敗る。先より由供福あり。頻り小威威を展ふ。義貞更に敵に。義貞より。主上。敵に逃る。義貞正成。これを保護。夫より。計を施して。是利と退下。尊氏と小対。すると。丹波路にも。老を脱。因て。幸山門より入浴。小尊氏兵と。河内再び。系師を襲ふ。以て。義貞。顯家。北。正成。の。お。按及。豊後河原に敗る。氏兄弟大に敗る。艦に。九州小も。氏九。五。の。兵。で。督。八。十。万。誘。ね。お。り。て。水。陸。より。上。洛。し。時。に。義。貞。令。で。受。て。こ。ま。と。兵。庫。の。ま。に。防。ぐ。然。れ。も。九。萬。數。せ。大。小。敗。る。そ。の。系。に。取。る。因。て。幸。の。敵。に。逃。る。ひ。の。氏。の。軍。路。に。入。り。禁。闕。で。燒。失。ふ。義。貞。一。箇。の。條。を。設。け。賊。軍。の。糧。道。を。斷。る。機。の。成。る。時。を。候。ひ。諸。將。と。期。を。約。し。て。按。と。攻。め。高。師。連。守。つ。と。を。失。ひ。小。陳。院。に。た。ふ。き。不。至。は。こ。の。氏。の。眼。目。土。波。惡。源。太。万。死。入。て。戦。ふ。に。官。軍。大。に。降。易。し。師。連。ま。と。敗。兵。と。集。め。堅。壁。に。防。ぎ。戦。ふ。官。軍。の。少。く。度。と。

失ふ。愛。に。義。貞。諸。方。の。將。の。期。を。違。る。を。知。り。以。服。屋。義。助。名。和。長。奉。を。副。將。と。て。出。る。小。賊。軍。大。小。進。ひ。戦。ふ。連。に。格。闘。し。て。こ。を。敗。る。頼。て。東。寺。の。門。下。に。到。る。氏。に。居。る。を。知。る。大。に。尊。氏。を。呼。ぶ。つ。と。て。連。年。天。下。兵。革。を。苦。し。む。罪。の。民。人。を。殺。ま。す。と。唯。吾。と。汝。と。今。在。る。今。吾。と。汝。と。戦。ひ。の。所。に。て。雌。雄。を。決。せん。頼。と。出。よ。と。大。喜。夢。に。罵。は。を。受。て。是。利。が。氏。連。に。出。て。戦。ふ。と。ま。と。重。能。等。を。使。め。義。貞。條。計。合。期。せ。ま。大。小。味。方。の。敗。る。を。り。君。と。戦。ひ。の。辱。で。雪。め。んと。ま。窮。前。端。を。咬。の。勢。ひ。あり。こ。ま。に。對。し。ま。つ。と。之。意。を。不。似。ま。と。と。鑢。に。推。つ。と。注。め。ふ。け。ま。尊。氏。も。怒。り。解。て。竟。に。出。て。戦。ふ。と。平。と。て。義。貞。の。後。を。襲。む。義。貞。圍。隙。を。あ。て。こ。を。防。ぎ。且。賊。軍。を。突。敗。は。因。て。賊。軍。大。に。怒。り。忽。ち。小。圍。け。廢。く。義。貞。沸。く。圍。を。脱。し。山。に。歸。る。と。得。る。是。より。後。是。利。氏。の。小。傳。に。い。ふ。と。く。亦。福。を。り。て。天。皇。に。奏。し。降。洛。を。許。し。ま。ひ。と。義。貞。恨。ま。う。ひ。あ。り。則。恒。良。親。王。で。元。北。の。義。貞。も。義。貞。柄。怒。解。て。太。子。と。奉。り。戦。前。の。金。が。傍。に。到。は。知。途。中。に。大。雪。に。あ。ひ。人。馬。多。

楠正成

楠正成者本姓橘氏有忠義之勇有籌

策之功其守城野戰之勞皆是勤王之

志也人悉知之不贅此

人皇三十一代	敏達天皇曾孫橘諸兄公十二代伊豫	耶代橘遠保十五代之孫	橘正玄	五位下河内判官	正成	正氏	淡川三子討死	正季	正行	正之	正儀	正勝	正元
			左近衛大夫		左近衛大夫	左近衛大夫			帶刀左門尉		二郎左門尉	左工門尉	楠小太郎

本執通記柿公湊川不致死の條に云く。正成忠貞絶千古。計策通於神。遇於妬不
 改忠志。陷死地不失勇武。可謂古今絶倫之賢臣。本朝無双之良將矣。累世
 以智仁勇稱之。亦不僭言。就中可其稱筆者。慮可朝廷之起興運則守孤墾
 待時到察可其衰之運則以躬報朝恩。苟非通于人道之理。亂達天道之盛
 衰豈能造于此乎。後世猥議振戰輕投一命英雄之心地。孰人察之乎。惜哉傷
 哉。天不資王室矣。盡棄筆歎乎。

楠正成の子の事

建武元年春二月諸卿議し、（楠正成の子の事）經軍卒の恩賜ハ邊澤に與るとも。まづ大功の諸卿に於て、その賞を定むべしと。檢非違使左衛門尉に任じ、播磨河内の西國を賜ふ。或ひいふ、東播磨河内所小封位と。然るに尊氏東及ふ再び礼を犯せに因て、義貞正成をして、進討の宣旨を賜ふ。この大敵を防ぐと。いとも、義貞竹の下の戦ひに利あり。その氏猛威を震ふに及びて。事を保護し、敵に登り。と。さうして、後、肺肝を摧神機妙算の奇計を設け。さうもに威勢、破竹のごとき。尊氏連及び軍を退け。事、破洛多き。めける。この時、伴信を雇ひ、戦死の尸を尋ね。め。世に、泣男を用うるの術計、更に人鬼の表に出で。敵軍を殺戮する。め。且、懈ら。む。る。は。漢の子弟、陳平を再び。の。世に。出。は。と。い。ども。孰うこそが、右に、おん。然。と。い。ふ。智。運。の。衰。う。る。に。及。ぶ。か。何。と。も。ま。ま。さ。う。う。う。尊。氏。丹。波。に。を。る。の。時、義貞に謂ていふ。尊氏已に腹を破は、遠く逃が獲つべし。と。い。田。里。見。る。應。て。い。ふ。兵。と。い。

い。も。金。鐵。に。あ。つ。て。多。軍。士。と。い。ふ。疲。敵。う。と。ま。を。退。く。と。も。勝。利。み。け。ん。と。正。成。ま。づ。推。進。我。疲。と。い。は。れ。る。疲。ま。え。賊。軍。の。怯。え。と。い。ひ。獲。生。せ。ば。後。難。測。と。い。ふ。と。練。む。と。い。ふ。義。貞。種。正。威。復。北。國。顯。家。に。と。ま。を。現。く。顯。家。と。ま。を。持。て。い。ふ。賊。を。討。さ。る。節。度。ハ。義。貞。に。あ。つ。て。我。に。あ。つ。て。と。正。成。奈。何。と。い。ふ。と。ま。と。い。ふ。事。傳。来。し。の。ふ。及。び。尊。氏。再。び。敗。卒。を。集。め。東。歸。と。い。ふ。と。練。け。る。に。義。貞。顯。家。正。成。の。と。い。ふ。命。を。受。て。軍。に。義。貞。が。川。に。連。發。と。い。ふ。戦。入。雌。雄。い。ま。ま。決。ま。る。時。正。成。機。を。う。て。神。傍。より。回。り。敵。の。後。に。出。て。撲。と。攻。む。連。發。防。ぐ。と。結。を。と。大。に。敗。れ。て。播。磨。河。内。に。還。は。正。成。義。貞。と。兵。を。合。せ。て。ま。づ。打。出。の。宿。に。破。る。尊。氏。兄。弟。力。屈。し。艦。に。乗。り。逃。去。る。は。正。成。一。戦。ふ。敵。を。退。け。義。貞。に。謂。て。い。ふ。功。ハ。大。難。う。と。い。ふ。敗。と。い。ふ。易。く。機。ハ。得。難。う。と。い。ふ。易。し。必。破。竹。の。勢。ひ。に。ま。づ。練。て。と。ま。を。等。々。と。一。舉。に。て。賊。を。屠。る。今。忽。ち。て。時。を。過。し。尊。氏。再。び。勢。を。振。り。大。軍。と。う。ん。と。練。む。と。い。ふ。と。義。貞。と。の。妻。の。別。を。惜。む。西。に。出。は。の。ま。づ。正。成。復。練。む。と。い。ふ。お。軍。の。心。内。侍。お。在。て。敢。て。西。征。の。途。を。塞。ぎ。万。世。の。功。



何を棄は何ぞ亡きの戒を顧みざるやといひけしは後貞大に愧はるありといふも猶果さざる
 按に差りざる氏兄弟筑紫に渡り兵を誓ひ大挙して攻むは朝廷まことの兩手に防ぐ
 べきやう令せざるはま下正成筑紫の軍規を失くさるに防ぎ難きことと知つて一の孫を
 トけしと防門清忠を拒み。事もまた難きとて固て正成必死を決め櫻井の沢に於て
 その子正行を河内に帰し。淺川に陳して大敵に對し。修一一族殲死するも人のよく知る所多
 猶こまじう後の正行正依の少傳に説く。或人のよく楠正成は每度軍功あるのこまじう
 前代のついでに事人の及ぶざる智謀ある人の耳目を驚かすや後世にありても軍略義勇の
 とまじう。あぐに然るる人跡あり。事の如く受け。旗を赤坂に舉ぐるとき。左右前後より敵に
 一人の援くる者あり然るを二人孤軍に對し。赤坂の大軍を引うけ更に動ぜずて數月と守
 ほうや軍謀智略ありしもの人を和を濟るにあらず。事や事の時も憶へん。人の和を得ば
 といひざる平生の行ひと。民に忠惠を施しにあり。まて幾死の後にあり。王室日々に衰へて諸

國に北朝に帰し、官軍僅に紀路の諸城まで洗炭に粟池の志操を易く保ちしり。其
 是に及ばず満洲軍に降り。紀路の諸城も落ての後、楠家が千鈞破の二城固く父祖の遺
 誠を守り下せども降はとなく攻めども落さず。累年忠孝の名で美言さるる偏に正
 威が修光に民人未だ家に懐くが故なり。付て又楠正成家臣のうち、康直に賞罰正
 ち。更に私なき者を探して一郷或は二郷を守らし。貢税を必し収めて妻ねと小河内
 何しの里にや二人の農夫あり。その家極めて貧しけれども天性至孝の老あり。老る母を
 ひける。その母の頃疾病に罹り。次第に悩まされ、その子は大に憂へ、伺へて針灸薬餌に心
 して竭せど固より貧窮の故に及んで心のまじはれ性も達た。日夜救はるやとて病ひ重なり。其令
 且た小迫と看て夫も作さば俯して歎けども終方う然るにその頃他郷よりこれ来り
 一商人あり。その容膝をふて子にのたまふ。つねに難治の病とてども我某と云ふに八九治
 せし。然れどもその某舶来に價貴し。貧家の汝及ぶべし。是と云て指て予他より來り。予

けは盗とて他ふ活らるなり。今も老母も疾病をて人並にありぬ。下僕刑罰不行ふ。其の罪を逃べんとす。六國家の刑法を。奈何せん。この事。正法に訴へけり。正法に歎息。かゝる孝子の世に稀き。さう不幸に。その家貧く。老母が重き病ひ小まづて。他の馬で盗む。至る。嗚呼。さう誰か。還る。後で。一郡一郷を指揮する。夫等の。正法に訴へけり。夫等。知らぬ。職に。その任。不徳。さう。夫と。わづ。その。二郡。委託。その。賊。我。あり。と。深。その。身。で。馬。に。馬。で。返。求。る。老。金。で。返。さ。彼。孝子。が。質。入。る。田。を。償。ひ。彼。に。ふ。た。他。ふ。物。を。得。て。その。至。孝。を。祐。せ。は。且。その。医師。を。重。き。病。を。治。さ。効。あり。と。西。仁。州。と。い。ふ。の。と。不。仁。と。その。憾。で。逃。放。つ。さ。不。能。て。母子。を。え。う。是。と。親。人。も。い。ふ。と。尊。き。國。主。や。と。作。ぎ。貴。と。健。を。慕。ひ。備。車。あ。ふ。俱。に。死。ん。と。心。の。程。不。堪。ひ。けり。この。修。補。の。仁。政。多。けり。と。聲。を。て。願。ひ。を。省。く。の。こ。

其先詳

那和或名和作

長年 又太郎 伯耆守

長重 小太郎 左門尉

長生 小太郎

那和長年

年曆正成公

那和長年者伯州之豪也元弘年中後醍

醐帝逃出隱州微幸伯州長年奉迎之以

船上山為行宮而破賊兵因賜因幡伯耆

兩國建武之役最勞軍務戰死

按は小人が常陸に。名和長年初の。伯耆名和の人村。と。事。の。元。弘。年。建。武。五。十。五。世。の。常。陸。を。破。て。村。に。氏。を。移。し。父。行。高。弟。祖。父。行。秋。承。久。の。役。王。所。に。隨。て。東。軍。を。守。持。に。禦。ぐ。北。條。氏。の。為。に。食。邑。を。剥。る。長。高。名。和。の。地。頭。と。す。る。勇。健。な。て。射。と。善。い。家。富。族。と。い。ふ。と。を。さ。う。さ。う。村。上。源。氏。に。て。最。も。族。と。り。

那和長年の所

先づ礼に 後醍醐天皇。隠岐の國に遷させ坐しける。依に本富士名判官義綱。吉備
守護の時にあり。長年この君に奉事。謀叛を起さず。又ひつぎ女房小松。そのことを
奉ん。帝の怪し。思ふ。心で誠を為に。その官を下さしける。あて。義綱。心で願
け。お雲小波。塩谷判官高直。等。落らひて。頼て。その用を。あて。周て。帝。六條少。忠顯
を。りて。俱。ひ。藤九郎。が。忍びて。宿。る。竹原の中へ。出。ず。号。より。九郎。が。針。ら。ひ。あ。て。序
船に。お。せ。奉。り。伯。父。名。和。の。浦。に。着。けり。忠顯。卿。船。より。上。り。この。き。に。武。勇。せ。り。と。ゆ。え。る。人。あ
り。や。と。問。ふ。道。行。人。答。て。つ。く。名。和。又。太。郎。長。年。と。ま。う。ま。老。の。ひ。が。家。富。一。族。廣。う。て。對。て
善。し。心。を。別。の。者。に。い。ふ。忠。顯。な。う。吹。澄。頼。て。勅。使。に。ま。て。如。此。な。う。長。年。が。武。勇。の。跡
を。う。聞。く。も。是。処。に。ま。て。出。遇。さ。る。べ。し。と。則。勅。使。を。ま。ら。は。憑。れ。来。ひ。と。や。否。勅。答。あ。れ
と。あ。り。け。し。長。年。の。程。よ。う。塩。谷。名。判。官。が。落。ら。ひ。あ。り。う。相。を。得。う。と。い。ふ。也。も。あ。の。月。の。族

と。集。會。す。酒。饗。と。あ。り。け。る。や。ど。に。餘。の。人。の。心。を。憐。れ。何。と。も。い。ふ。坐。中。で。り。る。ま。下。金。子。を
小。太。郎。長。重。進。出。て。言。ひ。や。う。も。う。今。に。至。る。人。の。欲。する。所。の。者。は。名。と。利。の。二。つ。な。う。我
等。も。十。善。の。君。に。憑。は。ま。さ。る。と。て。速。に。去。る。所。謂。う。や。死。の。軍。門。に。曝。ひ。と。も。名。は
末。代。小。強。は。し。一。筋。ふ。思。ひ。置。め。う。う。外。あ。る。べ。し。と。坐。中。で。白。眼。を。ひ。け。し。金。一。圓。小
長。重。が。後。論。最。極。せ。り。ま。う。異。議。の。あ。る。ま。で。と。い。は。う。て。長。年。の。忠。顯。ふ。ら。ち。對。ひ。詔。令
を。奉。る。勅。答。を。う。て。速。に。金。銀。の。用。を。さ。う。又。太。郎。長。年。と。小。太。郎。長。重。の。出。遇。ひ。に。来。り。
在。に。船。と。小。入。と。ま。さ。る。と。構。へ。ま。で。も。暴。の。と。ま。で。出。遇。ひ。に。あ。り。け。し。長。重。著。る。
獲。の。う。に。新。薦。と。卷。て。主。上。に。負。ひ。抱。ぐ。と。い。は。し。奉。は。長。年。近。き。人。を。廻。し。必。ひ。三。つ。仔
細。あ。つ。て。船。上。に。兵。糧。と。聚。む。我。余。の。因。小。在。る。起。米。穀。二。荷。と。運。ぶ。者。少。く。後。五。百。文。と。費。す。と。あ
小。觸。う。け。し。我。も。い。ふ。と。ち。出。て。劣。ら。し。と。運。ぶ。と。小。忽。地。五。千。石。名。と。積。ぬ。か。て。一。家。の。財。宝
と。も。悉。く。九。運。を。各。己。が。飯。炊。火。と。り。て。百。五。十。條。池。集。る。船。上。に。警。固。せ。り。一。族。あ。る。名。わ。七。郎。

長年の圖賛いそぐ
潜龍飛出海島、舉族首
唱征討、計畫行在安危

忠義満山
旗旗

名和長年



名和長年
勇を揮つて
大宮小
戦死す



旗天を操め、劔戟尾花の霜のどくかくて、きんせん聖運をひうせりす。今時の男とをええにける。

その針葉舎初廿七。長年ハ養貞が隊にあり。養貞奈寺の門下に到り。その氏を呼之。後賊

は一本のうゝ支也。其年が戦死秘巻を可也。

人皇九十八代 崇光帝觀應元年卒
今安政三辰追 五百七年乙戌

護良之命與六波羅

陣勞然恨無恩報及

テ
ソノ
シ
テイナ
キス
コレニ
ツヒニ

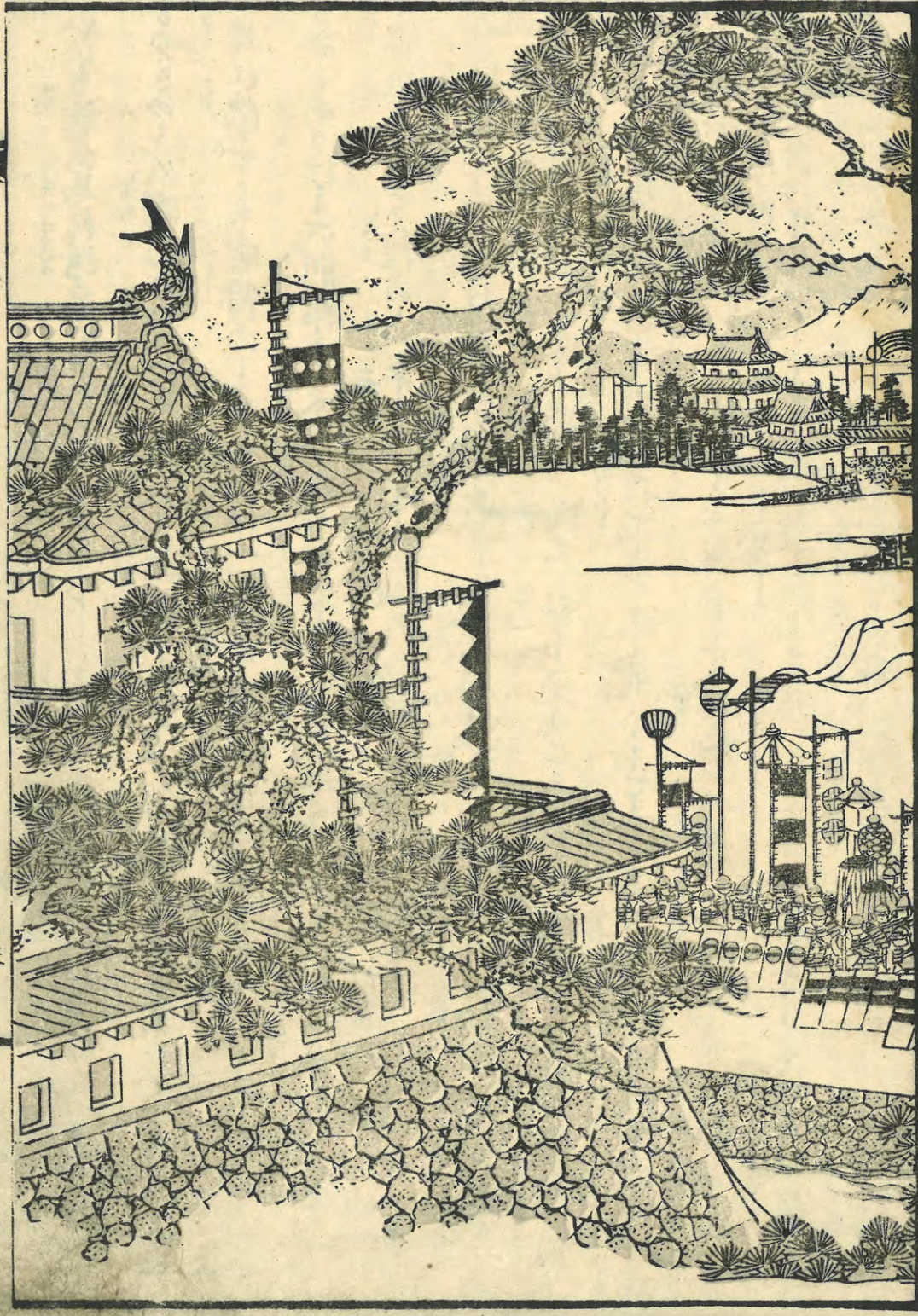
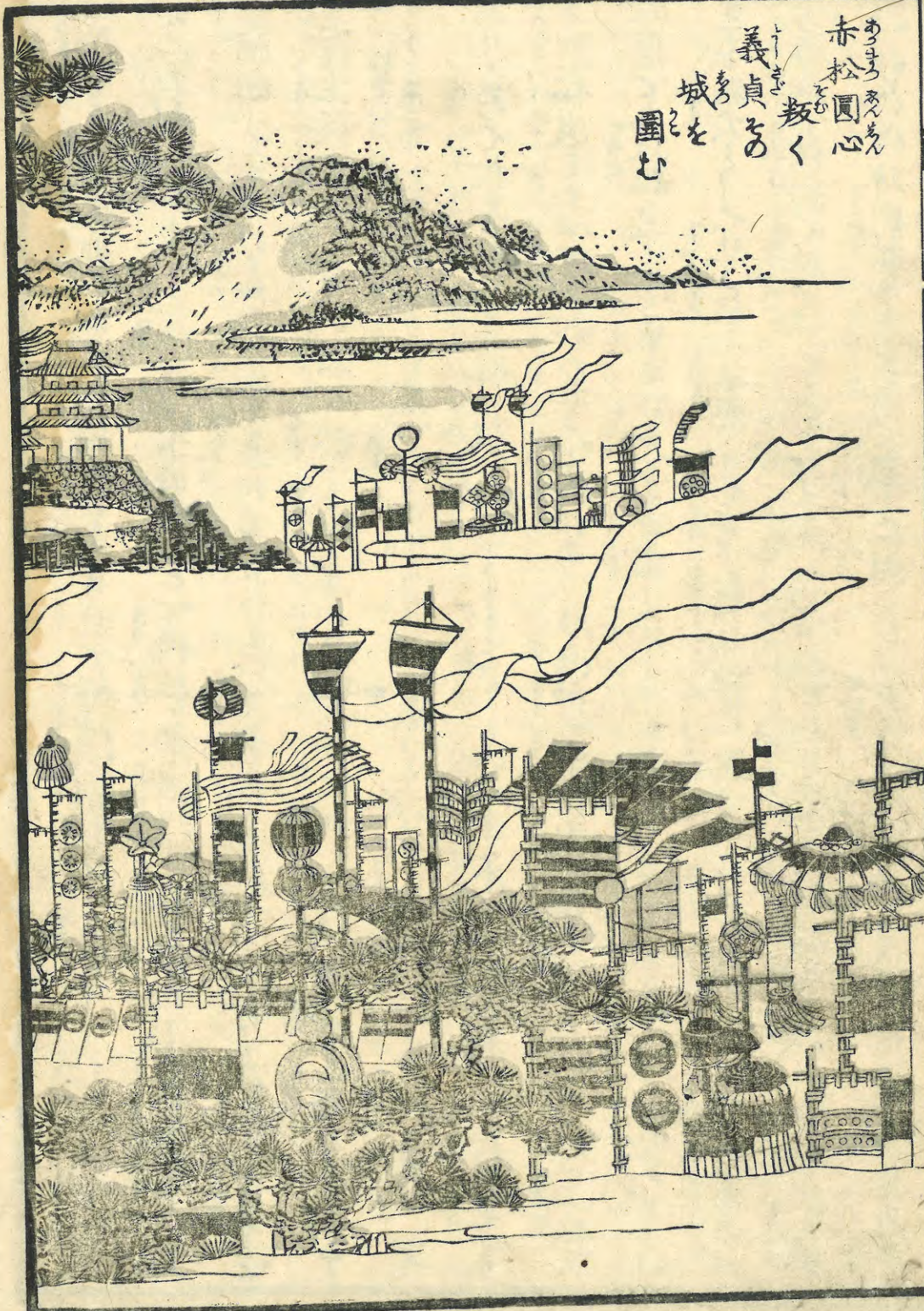
其子弟而歸之遂

赤松の上に園を造りて村上源氏の嫡流にて名家貴族なりともいふも園心賞の落
を怒り及んで足利氏に属する。まに則祐の孫に至り。満祐不良の心をせし。我教
將軍を弑する。世々大義に悖はせりて逆賊の汚名を得。い名家の類といへん

諸君。その父圓
 ちあら
 ちとや せ
 十銀破を攻め
 ろとら ぬ
 同て六波羅の令
 りナナ さい
 乾資とて送り
 けり。あゝ とも
 を生捕大に味
 わさ
 して勇ひけるが
 合休なり。その
 ぐら せい
 のて軍勢の隊
 ろとら
 らんとて六波羅
 をとて。その井寺

ぐ圓心變て大敵
 軍ハ必明日多々
 少く多くの兵士
 敗卒を集め。之を
 在家に火をうけ
 する橋に在るの
 難けしむ。互に大軍
 此処に渡り

赤松圓心
義貞の
城を
圍む



といひも敢て馬に跨る。さや打入んとするやど小圓心とて停止め。この頃の雪消ぞ。水嵩増
 するところらぶ。剛敵もやうび馬で馳入と推流さきとて人少。胡虜とあるきぞ。や亦急る。
 彼岸に渡さとも雲霞のどき勢の中へ一誘馳入らば必討ま天下の安た今日に限らば早
 するとありけと。則祐まづ太刀を収め。徒容とて言ひやう。いつふも口渡のどき。然まどもい
 軍勢。渠に對する程る。さやうたきとて做ひき。敵が百分一の小勢とて。大敵を破らへ速に
 あせに系次猶像ささふ小勢ある。さう遠さきとて破まらえ太々が兵もに。兵勝のゆゑ密に教入の
 機を事。速ふとの利ふ事。疾との不克と懸とりの。こま吾この困兵とて。強陳と敗る様ふ
 といふやとひ捨て。限り流は川水で推披きて馬うち入る。こまとて入て飽る。伊東河東林。小寺相
 模。宇野。玉粒の五誘引づき。川へ廻とてち合とて。中にも伊東ハ馬強也。さうも烈き流を厭
 む。さうま交まに岸につく。小寺相模ハ馬強放し。さう兜の天をさうり。水の上へ入えける。水底で潜
 け。さう先小流りのき。洲ふまて。種の水で。瀝け。氣勢ハ。実ハ鬼神のどき。さうこの五人の威勢にう

得の大軍怖る。東西に辟易し。蒐んとする者。臣于時。能希守。乾資（一作乾資）。此景勢。見え
 はる。も。続け。老共。と。下。知。と。う。年。終。傍。の。軍。兵。を。二。回。小。川。に。打。入。し。て。さ。う。も。小。川。は。川。水。も。是。が。為
 小。堰。と。い。う。平。地。を。歩。行。ど。う。も。さ。う。さ。う。と。う。ち。渡。り。と。三。三。三。に。責。成。ふ。是。に。因。て。六。波。羅
 勢。さ。う。も。大。軍。と。い。う。ど。も。機。を。吞。ま。て。義。勢。あ。く。固。き。靡。き。を。え。え。け。る。で。赤。松。勢。勝。た。す。て。
 堅。操。に。蒐。ま。し。て。二。支。の。あ。く。引。退。と。何。方。ま。で。も。と。逐。蒐。て。ま。る。系。師。へ。入。入。六。波。羅。の。兩。揔
 断。大。小。旗。さ。例。の。ま。で。隅。田。の。橋。河。野。を。く。教。で。所。に。防。ぎ。け。る。が。大。宮。極。川。楮。腰。を。油。の
 小。路。五。十。餘。箇。所。小。火。起。つ。て。熾。く。し。り。殊。に。晴。夜。の。と。う。と。う。と。勢。の。多。少。も。え。え。す。ま。ひ。あ。つ。ま。路
 中。一。刻。に。滅。び。ぬ。る。と。さ。う。え。え。ふ。け。る。ま。下。さ。る。梅。隅。田。の。兩。河。野。九。永。左。門。陶。次。郎。教。小。勢
 と。え。え。め。て。陳。を。整。攻。打。や。ど。い。長。途。に。労。さ。し。赤。松。勢。誘。馬。武。老。小。蒐。ま。ら。し。と。死。力。で。奮
 ひ。逃。は。る。も。あ。り。此。処。彼。処。小。旗。入。り。か。う。か。う。如。何。と。暮。は。わ。ら。う。一。隊。の。人。馬。進。こ。ま。は。こ。と。何。老
 と。え。え。る。所。に。大。塔。宮。の。近。臣。教。の。良。忠。命。と。受。て。援。兵。の。為。来。と。う。か。り。因。心。大。に。歎。び。て。ま。る。是

君不叛之不患也。且君又功居祿。登臺。綸言。食。乃。及。之。宿。人。深。味。之。ハ。ベ。ー

羊玉堂藏

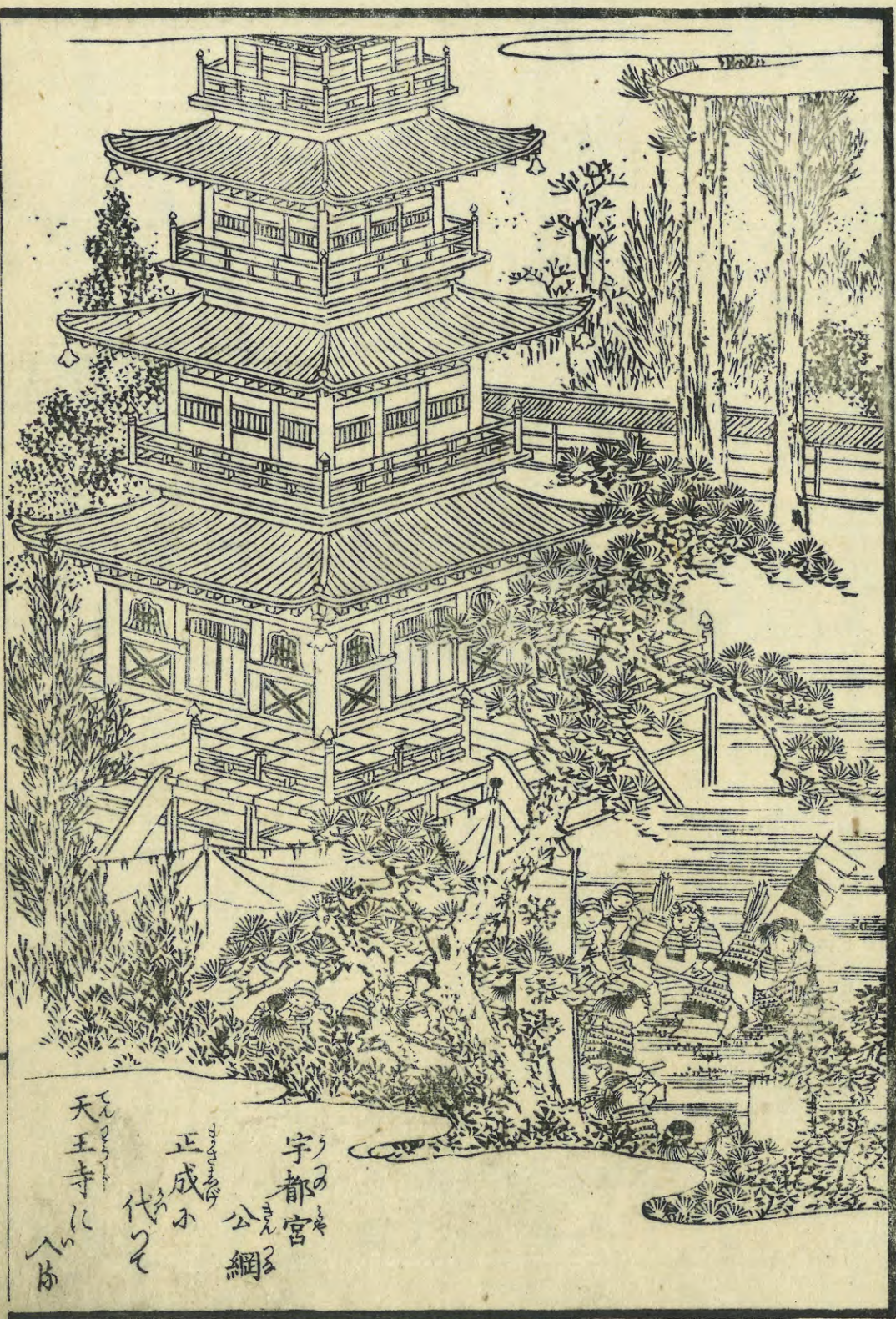
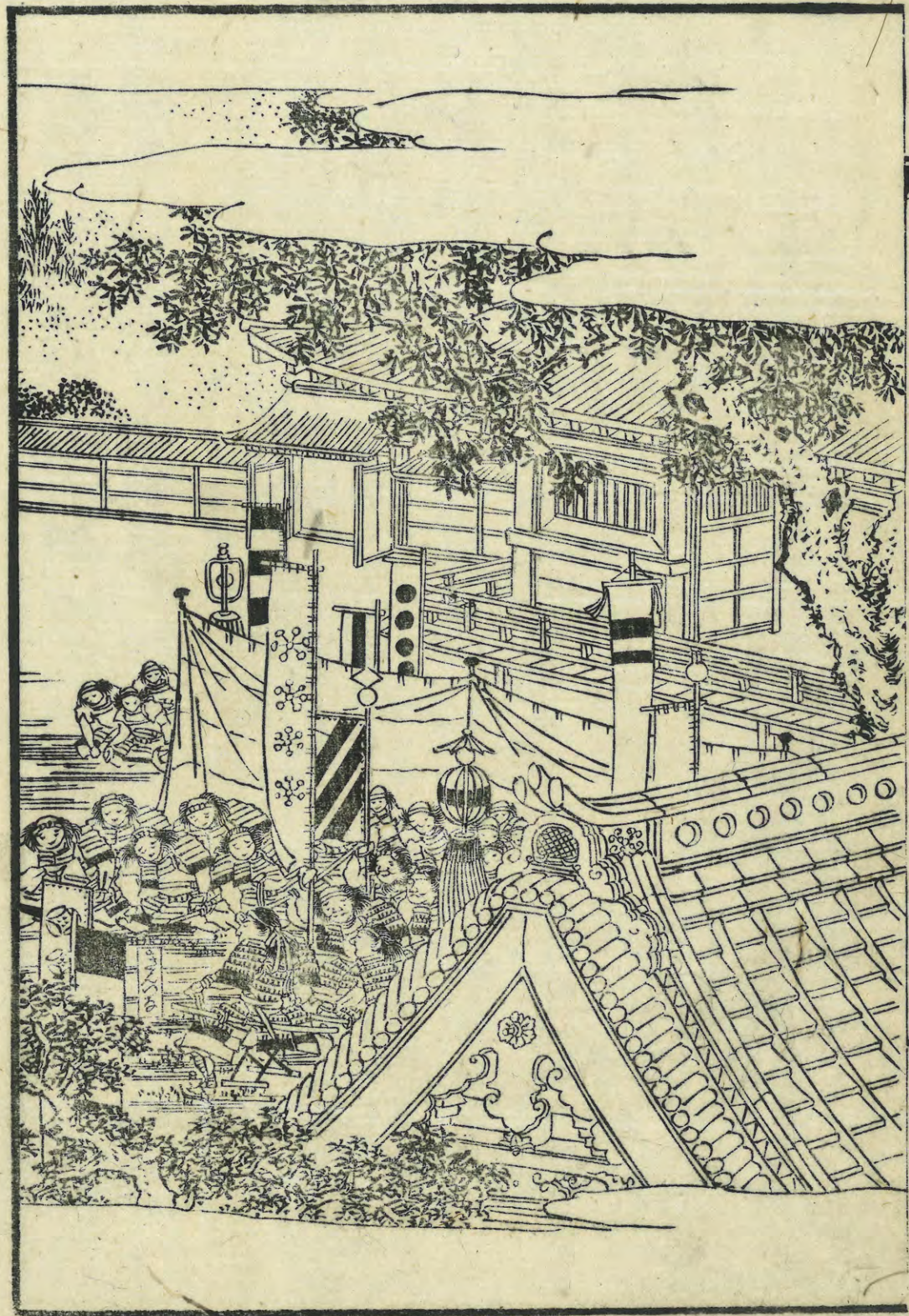
宇都宮公綱

初めの名は綱目と申と松以下野の人なり。其先右大臣藤原兼通より出づ。綱目は
 権守を経て。治部大輔に任じ。元弘二年礼部に。兼降六波羅の勢少きなり。當時入通
 綱目と。六波羅を助け守らる。小楠正成は四天王寺に軍し。連に兼と繋ぐんと。号
 小園で隅田通倫も橋宗康の両方に兵七千餘勢で副て。とて逆ひ繋ぐむるに。楠が為
 に敗らして散々に打たる。六波羅怒て這回ハ。宇都宮に綱目をして。正成と繋ぐむるに。
 綱目領堂にて紀氏清氏の輩と聚むるに。その勢がて七百餘なり。初め隅田通倫の七千
 餘勢を。戦ひに利あると。今この小勢なりと向くと更に勝てざる程なりといども。軍を
 勢の多少に。軍勢一致すると。雖はとの境にあり進めや進めと下知せり。同七月十
 九月。都にて。抄律儀の天王寺へ向ひけり。

按はふ一本にいつぽんいそいそ東寺とうじをおとままふふ主従しゅじゆ僅わずかふふ十四しよ五ご誘きがを徑やどににええううがが洛中らくちゆうににああるる

所の手の老地加つて。四極作道に到はとまふ。五百餘誘ふをぢりけけ。常行逢
考の権門勢家といふも。宗馬で奪ひ入夫と蒐えて通りける同行旅の性友道を枉
園甲の民屋扉と閉す我れ桂松に陳を取て明と侍と縁とり。本文と畧差り。
且まこゝ網が行軍の景勢蓋野伏強盗など亦の謀叛人の所業に似る。新田
後負兵庫守陳久軍勢の死防と幕下脱れ小山回る家が軍。青森を刈の車に競ぶまふ。
雲壤の差ひのとこ網が威を示さんと。殺のどく縁せし。是非孰く辨へが。

この時和田正遠調ていそ。隅田の橋が大軍まゝ。小勢で必て一時に敗は。今公細きとも。
 何やどのやうあゝん蒐きて目に物いせん。と勇む。捕首と振る。軍ハ勢の多少にやぶ。や
 士卒の離合にあり。大軍既小敗してむ。と公細小勢とて向ふ。と必死で究やう。その
 鋒小まゝりまば我軍多く討とん。とて引きとて。必功で渠に殲る。現れと推ん。公
 未うして正成天王とて引拂ふ。公細ハがともやぶ。无无示地著て。残りんとするに。故に。



宇都宮
公綱
正成
天王寺
八

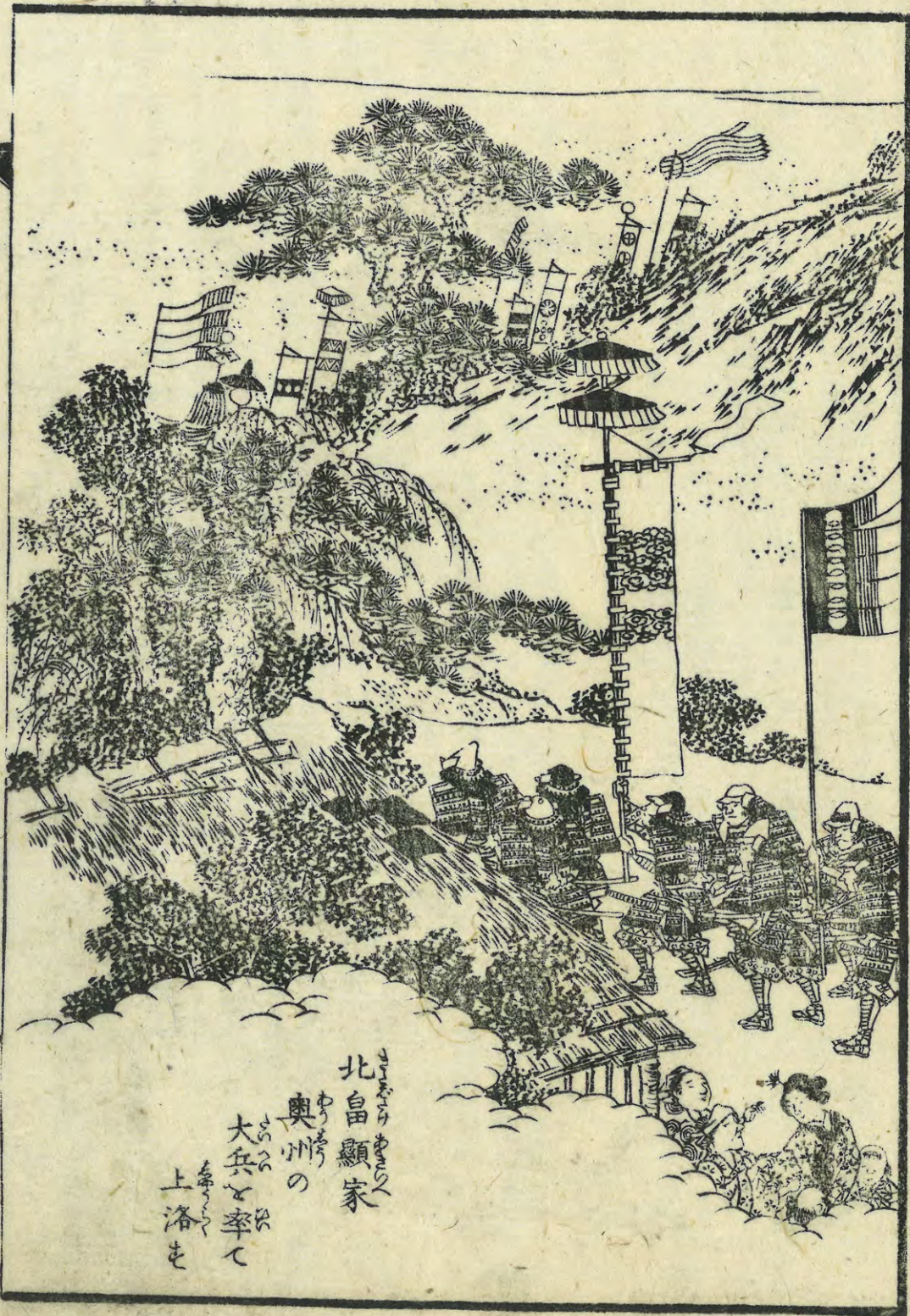
南朝の
年号

傳でんにんとん元弘げんこうと年紹ねんしやうと陸奥りくおととある。義良親王ぎらしんおうと奉ほうと出て陸奥りくお出羽でわで落おちむ親房しんぼうとと輔すけと孝氏かうし筑紫ちくしにもの渡亦親王わたりのしんおうと奉ほうと陸奥りくおに如ごとき相馬さうま胤頼いんり光胤みつひを攻せむむとの事

源頭家の話

源頭家の村上守の孫累世の傳紳ありて。從來勇武の家にありて。いふとも人となり仁惠ありて。勇略ありて。事ごとくをせし。ひと品に叙し。中納言に任じ。奥氏の牧となりて。陸奥守に補任せり。頭家の系下り。法良を授けり。國內大治する。ける。是より小建武の乱。出来て。奥氏大勲あり。事比敵に進み。官軍の統制精骨と爲り。いふとも賊軍強く。一々廢敗を以て。因て頭家に報し。早く軍中の兵を率いて。奥氏以下の官軍を援け。その氏以下の朝敵を退く。とありけり。頭家頼に國中の兵を促して。出陣し。下千餘騎あり。行海道十六及び。その威威を著し。因て。越州の兵を以て。杖き。糧を給ひて。頭家子。その二萬斗の頭家悦びて。その兵を收め。連日山口に到り。奥氏正成の統制と號し。兵勢を張て。その氏に。幾ふ。その氏が軍敗は。及び丹波洛。奪りける。再び。奥氏率て。聚めて。責を。件のお。極威を著し。杉及豊河系に於て。尊氏と連萌。いふ。氏兄弟。離れて。九州

へ奔りけり。事。山口より。取洛し。いふ。その功。法良。と。す。て。鎮守府。軍に。任ぜ。頭家の面目を。立て。奥氏。降し。し。ける。さ。我。糧。を。是。利。氏。大。軍。を。率。て。上。洛。し。楠。正。成。の。兵。庫。に。致。し。新。田。義。貞。の。恒。良。を。奉。じ。北。山。に。下。り。い。ふ。天下。大。々。是。利。氏。の。有。と。あり。け。り。頭。家。の。大。憤。る。と。あり。後。で。報。今。も。あり。け。り。中。の。軍。兵。等。も。時。機。で。兩。端。に。計。り。て。之。を。速。に。應。ず。る。頭。家。の。武。勇。も。い。ふ。今。是。利。氏。の。威。勢。は。き。ふ。勢。を。對。し。て。離。卵。と。り。て。盤。石。を。擊。つ。の。喻。不。異。と。い。ふ。心。も。す。も。誓。し。て。頃。延。え。年。十二。月。天。皇。を。東。歸。と。道。を。の。み。苦。野。に。入。り。都。て。建。南。朝。と。稱。せ。し。は。と。あり。隱。し。あ。り。け。り。は。頼。に。軍。勢。の。地。集。る。雲。龍。の。と。あり。し。頭。家。大。に。力。を。得。て。奥。氏。を。率。て。苦。野。に。到。り。て。是。利。氏。を。誅。滅。し。存。る。と。あり。て。後。に。建。一。利。根。川。に。文。え。し。む。北。島。方。兵。部。井。十。郎。さ。る。亦。之。弟。等。先。渡。り。大。に。鎌。倉。勢。を。討。つ。鎌。倉。勢。敗。る。と。あり。時。宇。部。官。公。細。路。め。紀。實。清。堂。千。有。餘。騎。頭。家。に。降。参。り。その。時。村。田。義。貞。上。野。に。記。り。兵。二。萬。と。あり。頭。家。に。合。ひ。頭。家。信。勢。ひ。法。良。就。に。鎌。倉。を。討。つ。と

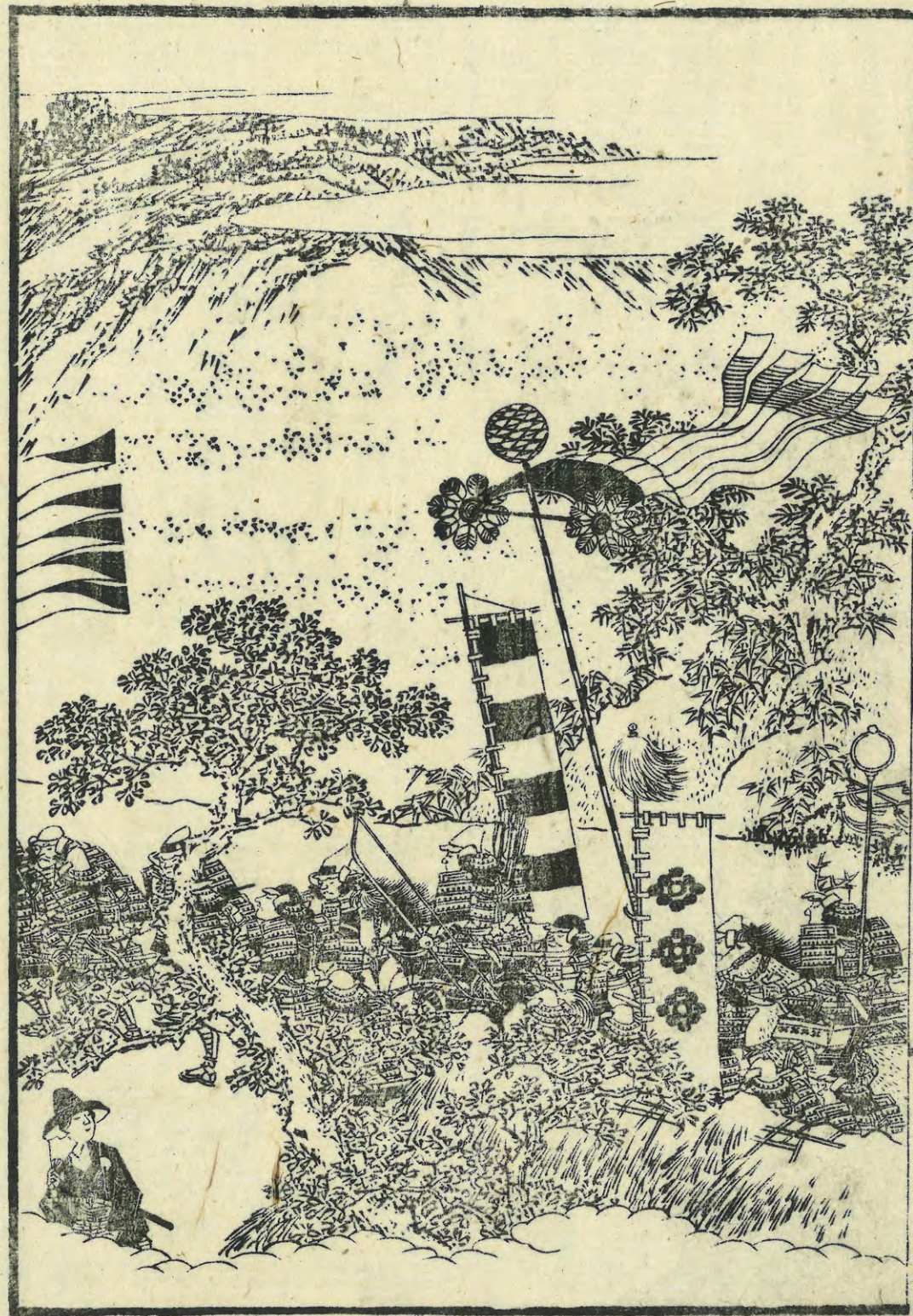


北畠顯家

奥州の

大兵と率て

上洛を



うり夫より上洛とせしむるが、利方士は頼遠桃井並事。後うりてとて、頼遠が兵五
十萬、鎌倉方五萬との士は桃井より破き、博多、勢勢、乾坤と初う。銀光、迅電、眼と後、然
まども衆寡敵せず。連事頼遠も傷を被り、軍兵多く討死し。或ひは東西に奔る、一は敵ふ
べき、後勢ありて、散に逃さる。因て頼遠も興る。威勢竹を被るが、頼遠も入洛をえん。人
る氏、皆て大に破さ。在来の諸將とて、逃に防ぐといふ、下、食糧を乏しく。宇治勢を、小軍一川で
前にまで防ぐといふ、高師泰、進み、うりて、背に川を流る。とて、戦地の要といふ、いど、古
え、今この機計とて、賊を、頼遠、拒むりの、敗れ、えらび、といふ、意、示、敵、百、國、を、破、り、う
有とて、威威と揮ひ、吾軍、八、祖、裡、小、屋、とて、その威勢、敵に、及ぶ。とて、い、破、の、を、い、て、拒、ぎ
幾、の、ふ、如、さ、る。とて、その理、とて、推、て、逃、け、い、衆、後、と、決、一、々、高、師、泰、同、師、を、細、川、頼、春、依、り、
本、氏、頼、周、道、義、と、始、め、一、人、ま、千、の、勇、將、師、と、帥、ひ、て、進、の、必、と、美、濃、の、玉、の、境、を、走、地、と
り、に、到、り、け、り。この地勢、示、孫、川、背、に、走、地、川、と、幸、う、頼、軍、と、不、屯、く、陳、と、列、ね、り、蒐、る

小頼家が軍の青野が、東の軍に、うり勝て、走、地、小、由、り、道、と、て、勢、及、て、頼、遠、に、芳、野、到、り、え
う、て、既、に、南、都、不、屯、け、り、白、川、結、成、入、道、進、と、い、う。若、大、軍、と、率、て、遠、く、敵、ひ、功、と、戦、
ふ、と、い、う。今、賊、軍、走、地、不、屯、く、芳、野、に、入、り、是、人、と、聞、ひ、て、背、と、勢、の、全、ま、の
勝、に、あ、り、世、の、人、不、武、と、傍、ら、走、下、今、うり、引、返、し、走、地、の、敵、と、戦、て、頼、遠、不、入、り、賊、と、雌、雄、と
決、せん、と、い、う。と、い、う、力、く、い、ひ、け、い、頼、家、の、敵、を、多、う、と、新、田、義、興、に、牒、ド、合、せ、進、入、り、洛、に、入
ら、ん、と、い、う。桃、井、並、事、等、と、い、う。と、い、う、進、ひ、頼、一、も、連、事、七、百、餘、兵、と、率、て、南、都、に、至
り、頼、家、と、改、む、様、と、初、う、と、い、う。と、い、う、頼、家、も、隊、伍、と、整、へ、南、風、北、風、吹、ひ、け、り、と、い、う。と、い、う、
め、う、り、敵、ふ、色、に、勝、た、る、と、い、う。將、ハ、橋、を、平、ハ、橋、は、桃、井、並、事、是、う、り、爲、青、野、が、東、の、敵、ひ、不
う、ち、負、て、偏、に、耻、と、雪、ぐ、の、を、あ、り、美、濃、と、い、う。と、い、う、討、死、し、將、率、心、と、致、と、射、と、い、う。と、い、う、
傳、り、も、せ、と、面、も、振、で、攻、撃、と、い、う。頼、家、が、軍、大、小、礼、と、儀、禮、と、通、と、い、う。と、い、う、頼、家、の、弟、頼、俊
及、び、新、田、義、興、散、兵、と、収、め、八、幡、に、據、り、陳、と、す。と、い、う。高、師、泰、と、い、う。と、い、う、八、幡、と、圍、す、と、い、う。と、い、う、

大軍と率て八幡で攻を一時に陥落さんと願家も奥より守つて速に援と往す。八幡を
 経るやどに願家の敗卒を集めて天王寺に祀る。八幡の援兵さうへんせり。師並利と嘆よりも。
 兵を分て八幡で圍す。自才天をふれ赴きて。雌雄と戦ふ決せんとい願家が軍大不礼と兵
 士四方に散る。願家僅に股肱の師を千餘誘て従へて。まづ芳野へ赴くと馬の鼻を向る
 不降連早のおるまふ夫と素と士卒を進め。ことと進ふてまゝをり。願家馬を回して奮
 勢突戦時と後。敵ふまはしと戦回大に勇威を奮ふといども。従卒多く討たせしと他は援
 兵さうその才金織小あらふと。渾身殺箇所の勝を負て。竟に安徳野に戦死せり。時に年
 二十歳降連が軍旗尾四郎左門武孫清光その首を獲たりといふ願家 皇太子と承て
 賊を討し殺戮不功と得て王室の再興近きあらふと。及び一戦不利と失ふ。安徳野の處
 と清のふ呼天なる哉命なりと云ふ

日本百將傳一夕話卷之九 終



大日本帝國西海道九州